

<たまりませんわ>

いきなりだった。「あら、あんた若いやないの。男前や～し！」。玄関の扉を開け、「こんばんは、予約しておいた前田ですが。」と言うや否や、飛び出してきた女将さんにパンと肩を叩かれて言われたセリフだ。どうやら私は、熊野古道歩きの杖をついたヨボヨボおっさんと思われていたらしい。一瞬キョトンとしたが、即座に「こいつは当たりやで。俺の感に狂いはなかったわい。」とほくそ笑んだ。

ここは和歌山県周参見町、民宿「かわべ」である。ネットで調べた時、ご主人と女将さんの写真がとってもアットホームだったのと、手作りの温泉露天風呂に遊び心を感じたのとで、ここを今日の宿に決めたのだ。

11月15日、日曜日、別府港から旅立つ。フェリーは関西汽船「さんふらわーコバルト」、大阪南港直行だ。夕方18:50発、翌朝06:30着だから、大阪方面に所用のある人には便利である。料金も、スタンダードソロ(個室)ネット2割引の¥10240で、JRよりは格段安い。難点は、ソロが8室しかないということだ。かなり前から予約しておかないと取れない。

妻と共に鉄輪の湯に浸かり、横断道路沿いの「ロン」で中華の夕食をとった。フェリー内のレストランは高くて不味い。食事は、事前にとるか持ち込むかのどちらかにすべきだ。

先ほどの店で調達した惣菜3種と、赤ワイン1本片手に船上の人となる。就寝までの友はこれで十分だ。個室には薄型テレビもあった。

翌06:30、大阪南港ATC埠頭にて下船、地下鉄中央線から弁天町で環状線に乗り換え、JR天王寺駅で「くろしお1号」を待つ。この駅は巨大なターミナル駅で、JRだけでもホームが19もある。通勤時間帯とぶつかり、田舎者の私には自分の乗り場まで行くのが一仕事だった。人が多いのには閉口する。よくもまあ、一体どこからこれだけの人間が湧いて出でて来るのだろうか。

電車に3時間余り揺られ、11:20に古座駅に着いた。あの悲劇(『ケツはディープに』参照)の駅だ。あれからもう1年経つのか。皮肉にも空は澄み渡っていた。

すでに車内で準備は整えており、11:30にスタートを切った。半月遅い開始だ。もうジャーニーの時節ではない。寒くて、上下のウインドブレーカーははずせない。

秋の旅の前には必ず人が逝く。今秋にも叔母が亡くなった。予定を2週間延ばしたのはそのためだ。誰かが、「そんなことは、もう止めとけ。」と諭しているのか。それでも行かなければならない。明日はないのだ。残された時間に余裕なんてありはしない。

1km程走って国道42号線に出る。すぐに、昨年タクシーを拾ったパチンコ屋の前を通過した。串本まであと7kmという所だった。ジャーニーランでもウルトラマラソンでも、最初の5kmと最後の5kmとは重さが全然違う。最後のは、たった5kmが途轍もなく長い。そのことを思い知らされた場所だった。雨もザンザン降っていたな。

脚は軽く、左手に大島を眺めながら進む。「ここは串本向かいは大島、中を取り持つ巡航船、あらヨイショヨイショ...」の大島だ。冷静に観察すれば、古座～周参見間の海岸線は日南海岸に勝るとも劣らないはずだが、季節のせいか印象は薄い。

串本の町には何も未練はないので、弘法の湯の手前から山間部に入り込みカットを狙う。地図と勘を頼りに、少しも迷わず二色という所に出て国道42号に再合流した。カット成功だ。気分がいい。

左手後方に潮岬が遠ざかる。紀伊半島の半分はやっつけたということだ。去年の雪辱を果たしたと言っているだろう。

この海岸道は、アップダウンが激しいものの歩道は良好で、変化に富んでおり飽きない。重戦車のエンジンは初日だけあって快調だ。あっという間に 25km 地点の和深を過ぎ、江住、イノブタランドすさみ、口和深を経て夕闇迫る周参見に到着、17:00 だった。

ところが、私は宿の位置を誤解していて、1km 行き過ぎた所で気づき、交番で尋ねて事なきを得た。30 分のタイムロスだ。まだまだ学習が足りない、いい歳コイているのに。さて、お待たせしました。民宿「かわべ」の話に移ろう。

玄関での経緯は冒頭で述べたが、「こんな宿がほんまにあるんかいな」と思うくらい、ご家族総出演でおもてなし頂いた。今まで数々の民宿を利用し、そのどこもが素晴らしかったが、ここはその上に超が付く。そう、チョー最高、「もうタマリマセンわ」だったのだ。

かわべのスタッフを紹介する。

ご主人...一度脳梗塞をされたとかで、ネットで見た写真よりも元気がなさそうだった。私の汚れ物を洗濯してくれ、とても優しい人だった。夕食時には、でかいコップに「いいちこ」を並々とついで、「まあ一杯飲みませんか」と差し入れ頂いた。

女将さん...のりこ(憲子)さんという名前前で、世の中にこんな気さくな女将がおるんかいと思わせる人だった。しゃべりもフットワークも軽くて楽しい。和美さん...女将さんの妹さんで美人。歳は私より下だと思うが、お姉さんとは違うタイプの明るくて茶目つけのある人だった。彼女のお酌で、つつい私は杯を重ねてしまった。

T さん...私と同じ年で、航空保安大で航空管制官を養成する教官指導員の方。大阪在住だが、仕事上のストレスで現在休職中。療養を兼ねて、かわべで下働きをしながら 再起を模索中だった。初めは、和美さんの旦那さんかと思った。

宿に上がると、T さんの案内で二階の部屋に通され、そのまま屋上露天風呂へ。お世辞にもキレイとは言えないが、ご主人が創意工夫を凝らした代物だ。湯船も洗い場も広く、お湯はやや茶色がかって若干のイオウ臭がした。別府鉄輪ひょうたん温泉のお湯に近い。空が曇っており、満天の星空は叶わなかったが、レトロな雰囲気味わえた。

さっぱりしたところで、洗濯をと階下へ下り洗濯機の所へ行くと、ご主人が出てきて「洗濯は私がしておくから、あなたはどうぞ食事へ」と言ってくれた。これほど嬉しいことはない。ジャーニーで一番面倒くさいのは洗濯なのだ。お言葉に甘えて、そそくさと食堂へ行った。ここからが驚くなかれだよ。

台所のドアをノックして「食事いいですか」と尋ねると、女将さんが「前田さんはこちらへどうぞ」と居間に招き入れた。もう一組お客さんがいて、そちらは座敷でやっている。では何故に? 「前田さんは一人だし、見た瞬間、この人なら家族といっしょに居間で食事しても大丈夫や。」と判断されたらしい。有難きご配慮、胸にジーンと来ます。その通りです。飲み食いするのは独りでも構わないが、みんなと一緒にの方が 100 倍は楽しいに決まっている。感激だった。

居間に入ると、大きなテーブルにドーンと料理が並べられていた。予約注文しておいたのは伊勢海老のフルコースだ。少々贅沢だが、一年前の串本の夜があまりにもお粗末だったので、夜もリベンジしなきゃと思いついたのだ。最初に立ち寄った居酒屋(ホテルで紹介された)は、猫屋敷で猫臭く、次に入った焼き鳥やは不味くて高かった。カスだった。

三匹の伊勢海老を、刺身、焼き、蒸し煮、鍋、味噌汁で堪能させ、ホゴの唐揚げ、車海老の塩焼き、サザエの壺焼きから手作りのごま豆腐、鹿肉の佃煮、メカブの酢の物、鮎の甘露煮で止めを刺すという豪華絢爛版だ。ほんとに一人で食べるんかいなと、この重マエダがビビる程だった。

ビールを飲みながらこれらの料理と格闘していると、ご主人が大きなグラスを2つ持ってやって来た。グラスには、焼酎がロックで並々と注がれている。「一杯つき合って下さい、

いいちこですが。」と私にくれた。「いいちこ」は大分の麦ではないか。麦焼酎は、まずめったに口にしないのだが、こういう時は別だ。喜んで頂いた。ご家族の他の方々も、仕事が一段落して奥のテーブルで夕食をとり始めた。ここから賑やかな団欒が続く。

私は、ビール大瓶2本とさっきの焼酎、更に日本酒を5合飲った。とっくにレッドゾーンを超えているが、この様なもてなしを受けて飲まずにおれる訳がない。飲まんと失礼や。嬉しくて、おかしくて、楽しくて笑い転げた。

話しの中で一番面白かったのは、ご主人と女将さんの馴れ初めの話だった。ご主人は硬派中の硬派で、なかなか女将さんには直接告れず、妹の和美さんにいっぱい貢物をして出しに使ったそう。その話を和美さんが面白おかしくするもんだから、満腹の腹が腸ねん転になりそうだった。 気になったのはTさんのことだ。航空管制官でも、そのプレッシャーは推し量り難いが、それを養成する教官の責任感やストレスはどんなものだろう。心神喪失症に陥り、職場を離脱してこの民宿でお世話になっているとのことだった。

彼は私と同級で、偶然にも大学学部が私の第一志望のと同じであった。ひよんなことで、私は第二志望の大学に入ってしまったが、ひよっとすれば知人か友人になっていたかも知れない。そこに妙な縁を感じた。大学4年の時に航空保安大を受けて合格し、それ以来、その道一筋だったそう。

私の様に、能転気でストレスを溜めず、人生を謳歌している奴もいる。Tさんの様に、「よかれ」と思って飛び込んだ世界なのに、こんな結果をもたらされた人もいる。お互いに、半世紀以上一生懸命生きてきたはずだ。「何故だ」と問いたい。性格とか運で片付けるには、あまりにも重すぎる。

しかしだ、まだ人生は30年ある。早く仕事にケリをつけ、次の道を見つけてほしい。しっかりした道が見つかれば、これからは10倍の楽しさを味わえる。濃度は100倍だと断言したい。自分の人生じゃないか。今までの借りを熨斗を付けて返してやる、というような気持でいてほしい。そして、私との出会いが再起の1%にでも役に立ってくれば、こんなにうれしいことはない。いや、「軽くてお調子者がいたなあ」とだけ思い出してくれればいい。とにかく元気を出してほしい。元気さえだせばなんとかなる。

どういう出会いなのだろう。去年、古座でのヘタレがなかったら「かわべ」には泊っていないし、Tさんにも会っていない。行く先々で、天が「おまえの元気を誰かに与えろ」とセットしているのか。古座での挫折も仕組まれたことなのか。くそっ!! 頭がこんがらがってくる。俺のジャーニーは、初めからルールが敷かれているのではあるまいな。ここで快走して、ここで雉打ちをして、ここをカットして、ここでへばって、そして、ここで～に出会うという風に。偶然で片付けるにはあまりにも出来すぎだ。

まあいいか。私には「元気」しかないし、旅を続けていれば色んなことがあるさ。どんな出会いでも、自分自身が楽しめば相手に伝わる。これが本当のスマイルランだ。

結局、18:00に食事を始め、20:00まで飲みしゃべり続けていた。翌日のことなど、頭からスッ飛んでいた。女将さんに促され、しぶしぶ二階の寝室へ向かう。階段には、乾燥済みの洗濯物がキレイに折りたたまれて置かれていた。もう、ほんとにたまりません!!!このお宿。初日にしてこの当たり、「なんて運がいいんだ」といい気分ですぐに就いた。明日の地獄を思い知らずに。